

「グループ学習の進め方」

牧野満（奈良・王寺北小）

グループ学習と言ってもその方法はいくつかある。「わかる」内容を発問として子どもに投げかけ、技術、技能を高めていくグループ学習、ゲームで起こる課題からその解決を図るグループ学習などがあげられるだろう。しかし、私がやるグループ学習と大阪支部のだれかがやるグループ学習は当然違うものであって典型はない。むしろ、グループ学習がマニュアル化しない方が健全であると言えるだろう。故に、私ならこんなことを考え、こういうことが大事じゃないかという「私のグループ学習」のイメージを伝えることしかできない。以下、授業で大事にしていることに絞って、具体例を挙げながら述べていきたいと思う。

1. ホトケの気持ちを持つこと

—失敗も「かめへん、かめへん」心の余裕を—

いきなり、何を書くのかと思われるかもしれないが、体育の授業をグループ学習でやる上で、これほど大事なものはないと私は考えている。（と言うよりは、私はこの気持ちをお忘れぬよう自分を戒めているのである。）教えた中身がいっぱいあると、あれも教えた、これも教えたとすごく意気込んでしまう。しかし、そんな思いとは裏腹に、子どもがなかなか乗ってくれないことが私の場合は今でも多い。準備にすごく時間がかかったり、運動場に出て準備もせず遊んでいる場面を見ると、授業の下手さを問わず、子どものせいにしてしまうことが多くあった。

つい、この間まで、リレーの実践を行っていた。運動場のトラックにセパレートの2コースを作るのであるが、これが3年生にとっては至極大変である。始めのうちは、石灰でコースをかくのにその時間の半分ぐらいかかってしまった。おまけに、石灰でかいた線は、もうミミズかヘビかといったクネクネしたものだった。その上を子ども達は走っていたのだから、「よう走れるもんやな。」とこちらが感心するくらいだった。しかし、それでも、やっぱり「かめへん」のである。「計画したことがこの時間にできなかったら次の体育の時間があるわ。」と言うぐらいの余裕の気持ちを持つことが大事ではないかと思う。少しずつ準備の時間が少なくなってきたら、よくできた子どもたちをほめてやる。教師に心の余裕がないと実践もヤラセになってしまう。ホトケの気持ちになって、グループ学習に臨むことが何より大切だと考える。

2. オリエンテーションでは

—「みんなでやるんだ」と言う気持ちを起こさせよう—

オリエンテーションでは、グループの役割を決めたり、授業の見通しを知らせたり、最近では、なぜこんな勉強をするのか、教材の歴史を知らせたりするが、一番大事にしたいことは、「これからこのメンバーでうまくいくんだ」「このグループで勝つぞ」というグループの結束をはかることだと思う。そのためには、グループノートや個人ノートが必要となってくる。グループノートが良いのか、個人ノートが良いのか、或いは、両方用いるのか、教材によっても、発達段階によっても違うが、余り細かくないもの（記録主義に陥らないもの）が良いと思う。グループノートをもとに、チーム名を決めたり、役割分担をしたり、子どもたちの話し合いが始まるのである。これからグループで学ぼうとする雰囲気グループノートをもとにつくりあげていくのである。



3. グループの発見をみんなのものにする —グループの問題をみんなのものに—

○実験を通して確かめる（予想→実験→まとめ）

これもリレーの実践からの話であるが、目標タイムを決め、それに向かって記録をとっている最中のことであった。なかなか目標タイムを達成できず、あるグループは、タイムの遅い子をアンカーにおくことを考えた。また、あるグループでは、スタートでつまづいてスピードに乗らないことから、一番にタイムの速い子をおいたのである。そして、両チームとも、最高タイムを出し、目標タイムを達成できたのである。そこで、本当にそんなことが言えるのか、全体で確かめるための実験をした。

「はやい子」を1番目に、「おそい子」をアンカーにおくことで最高タイムが出せるのかどうか？



結果は、すべてのグループで最高タイムを出せたのである。（7グループ中、6グループで目標タイムを達成できた）この後、教室で、どうして最高タイムを出せたのかを話し合う。「スタートに速い子をもってきたらスピードに乗れる」「バトンパスがうまくいったから」「走る距離がちがうから」などの意見を出し、わかったことをまとめるのである。

○話し合いで答えを出す

教室で個人ノートをまとめているとき一悶着があった。A君が自分のノートに、「…B君のバトンパスが遅かった。」と書いたところ、B君が、「速いと書かれるのは良いけど、遅いと書かれるのはいやだ。走る気をなくす。」ともめていた。そこで、

「おそい人」というのはいけないことなのか？ について話し合うことになった。

クラスの子どもの意見は二分したが、A君がB君の意見に対して、「タイムがおそいと言うだけで、その人がいけないと言ってるんじゃない。リレーをする4人の中でくらべているのだからおそいというのはいけないことではない。」と言った。また、勝つための戦術の上に立って「速い」「おそい」事実を使っていると言うのである。この意見に賛同する子どもが多くて、「体育の時間に使うおそい人と言うのはいけないことじゃない」という意見にまとまった。そして、

- ・ 比べる人がいて、「速い」「おそい」というだけのもの。
- ・ 「速い」「おそい」と言うのは、ストップウォッチが表したタイムだけのもの。
- ・ 速い=いい、おそい=いけないのではない。

この3点をクラスで確かめあった。

その他、話し合わせたことは、以下ようになる。

◎おそい人がアンカーを走り、速い人が一番を走ることについてはどう思うか？

◎運動会では、どうして速い人がアンカーを走るのか？

（詳しい内容については、夏の支部大会で報告する予定です。）

これらは、個人ノートやグループノートの記述、或いは、子どもの「つぶやき」や「めめ」から拾い上げ、それを全体の課題や討議の材料とするのである。何がわかったのかを明らかにし、全体のものにする所にグループ学習の利点があり、めめをもって黙々と課題に取り組んでいるが、何を学んだのか分からない「めめ学習」とは大きな違いがある。

4. うまくなったこと、わかったことをみんなで確かめ合う

記録会や発表会を開いたり、あるいは、研究発表会を開いたりまとめの授業として、うまくなったこと、わかったことを確かめる時間が必要である。小学校高学年では、子どもたちが、記録会や発表会などの企画をすることもできるだろう。